

障害者スポーツの在り方

—障害者理解のために—

鈴木 大 悟

目次

はじめに

1. 障害者スポーツとは

- 1. 1 障害者スポーツの歴史
- 1. 2 ヨーロッパにおける障害者スポーツ
- 1. 3 日本における障害者スポーツ
- 1. 4 障害者スポーツの分類

2. パラリンピックとスペシャルオリンピックス

- 2. 1 パラリンピック
- 2. 2 スペシャルオリンピックス

3. 2つの活動の取り組みと比較

- 3. 1 パラリンピック
- 3. 2 スペシャルオリンピックス
- 3. 3 2つを比較する

4. 障害者の真の理解のために

- 4. 1 これまでの整理
- 4. 2 理想的な障害者スポーツの在り方

おわりに

参考・引用文献

はじめに

私の親戚には障害を抱えた家族がいる。そのような当事者が親戚という身近な存在にいたながらも、私自身あまり気にしてこなかった。むしろ下手に接するのが怖くて自ら関わりを多く持つことを避けてきたのかもしれない。どこか遠い存在として認識していたのかもしれない。

私と同じように感じる人は少なくないのではないだろうか。障害を抱えているからといって、避けてしまったり特別視してしまった経験は多くの人が持っているだろう。それは、単に障害について知らないから、障害者を理解していないから起こることではないかと考える。どのようにして障害について知るか、障害者を理解するかを模索した時に、私自身が最も身近に接してきたスポーツを切り口として考えていこうと考えた。これが本論文執筆に至った背景である。

障害者の理解のための真の障害者スポーツの在り方を探るため、本論文ではパラリンピックとスペシャルオリンピックスの2つの活動を取り上げる。前者は、より競技志向の高い競技スポーツとして、後者は社会参加という意味合いでの生涯スポーツとして位置付けている。一見相反するように見える2つであるが、両者を比較し違いや共通点の中から障害者を理解するための真の障害者スポーツ在り方を考察していく。

第1章では、障害者スポーツの辿ってきた歴史を大まかに述べ、その後ヨーロッパ（特にドイツ）と日本の障害者スポーツの歴史を述べる。第1章の最後で、障害者スポーツを3つの観点から分類する。第2章では、パラリンピックとスペシャルオリンピックスを挙げ、その歴史や意義などについて述べる。第3章では、さらに2つの活動の取り組みを挙げて、両者を比較し違いや共通点について言及する。第4章では、1節でこれまでの整理をする。そして、2節で障害者を理解するための真の障害者スポーツの在り方を私自身の考えも踏まえて述べていく。

1. 障害者スポーツとは

1. 1 障害者スポーツの歴史

障害者スポーツの歴史についてその発端を高橋(2004)、渡(2012)を参考にして整理していくこととする。

スポーツの医療における効果は、古くは紀元前から伝えられている。18世紀には、フランスやドイツなどで運動療法が紹介され、スウェーデンやドイツでは体育の指導者により医療体操が提唱された。また、耳の障害を抱えた人々のスポーツが18世紀後半から発展している。1888年のベルリンにおいて、障害を抱えた人々の初めてのスポーツ組織・ろうあ者スポーツクラブが旗揚げされた。しかし、特に障害者スポーツへの関心が高まったのは、第一次世界大戦以後であった。特に第二次世界大戦中の大規模な戦闘により大量の傷病兵

が生まれ、その人たちの受けた障害のリハビリテーションとしてスポーツが取り入れられた。

今日における、パラリンピックなどに代表される国際的な障害者スポーツの基礎となる部分を築き、育て上げたのはイギリスのルードヴィッヒ・グットマン卿である。第二次世界大戦末のイギリスでは、戦後の傷病兵の社会復帰が問題となることが予想されていた。イギリスでは、彼らに最高の医療を提供するため救急医療から社会復帰までの一貫した治療訓練システムの専門病院として、ストック・マンデビル病院内に国立脊椎損傷センターを設立し、グットマンをセンター長として招聘した。死亡率の高かった脊椎損傷者を治療訓練として、またレクリエーションとして積極的にスポーツを取り入れていった。この医学的リハビリテーションにスポーツを取り入れたことの効果が、身体機能や心理的效果に大きな成果をもたらしたことに表れている。グットマンの「失った機能を数えるな、残っている機能を最大限に活かせ」という言葉は、今もなお障害者におけるリハビリテーションの基本哲学となっている。

1948 年にこれまでの院内でただ社会復帰を目的に行われていたものを、リハビリテーションの成果を表現するものとしてアーチェリーの競技会が開かれた。この競技会は、ロンドンオリンピックの開会式と同日に病院内で 16 名の患者が参加したものである。パラリンピックの原型の 1 つと言われている、「第 1 回ストック・マンデビル競技大会」と言われている。4 年後に開かれた同大会においては、オランダなどの外国から選手が参加し始め、それ以後「国際ストック・マンデビル大会」として発展していくことになった。先ほども述べたように、起源が障害者のリハビリテーションの一環であったため、スポーツの競技性を見せることよりも医学主導での大会であった。また、車いすの競技に限っているためこの時点ではまだ限られた障害者のみしか参加できなかったと言える。1948 年から 1960 年までの大会は全てイギリスで行われていたが、1960 年のローマオリンピックからオリンピックの開催地で行われるようになった。その後、国際的なスポーツ組織が統合されていく流れの中で、1989 年に「国際パラリンピック委員会 (IPC)」が設立。これによりローマで行われた大会が「第 1 回パラリンピック大会」と位置づけられた。

以上障害者スポーツがどのようにして誕生したかを簡単に整理した。障害者スポーツは初め障害者の社会復帰のためのリハビリテーションとして取り入れられ、現在目にしたり、耳にしたりするパラリンピックのような競い合うスポーツではなかったことを確認しておきたい。

1. 2 ヨーロッパにおける障害者スポーツ

ここでは、障害者スポーツについてヨーロッパ、特にドイツにおける障害者スポーツを取り上げる。ヨーロッパは、先述のように障害者スポーツの基礎が築かれ発展してきた地域である。その中でもドイツは、障害者のスポーツにおいて長い歴史を持っている。その歴史や進んだ取り組み、特徴などから障害者スポーツを見ていく。

ヨーロッパは、障害者スポーツへの取り組みが進んでおりそれぞれの国ごとに障害者スポーツ組織がある。大きく 3 つに分けられ、①統合型②複合型③中間型からなる。ここで

は詳しく述べることはしないが、それぞれの組織体系を見ても様々な特色がある。特色の違いはあるにせよ、国の政策として障害者スポーツが推進されていることに共通点がある。このため、ヨーロッパでは障害者スポーツが定着しているのである。1つの例として、障害者が何の問題もなく一般施設を利用できる点が挙げられる。現在の日本では改善されているとはいえ、かなり難しい問題と言える。ヨーロッパではなぜ可能なのか、それは一般スポーツと障害者スポーツが対等であると認められているからである。

ヨーロッパの障害者スポーツへの取り組みが盛んになった理由として、1981年の「国際障害者年」をにより「障害者みんなのスポーツ運動」が展開されたことである。これにより、障害を抱えていても問題なくスポーツ取り組むことができ、障害のあるなしに関わらず対等に施設を利用できることにつながっているのである。国による政策の違い、運動の違いが日本とヨーロッパの障害者に対する理解の違いに影響を与えていることが分かる。

これまでは、ヨーロッパ全体の障害者スポーツについて述べてきたが、ここからはドイツを例に挙げ述べていきたい。障害者スポーツはグットマン博士によるストークマンデビル病院での取り組みが起源であると言われているが、ドイツにも第一次世界大戦時からの長い歴史が存在する。ドイツでは、1951年にドイツ退役軍人会の指導者たちの主導により創設された障害者スポーツ連盟が中心となり推進している。¹ スポーツを治療に取り入れている疾患（知的障害や視覚障害を含む）は日本に比べはるかに幅広い。ドイツのスポーツ文化は、地域密着型である。² 学校による部活動ではなく、全てのスポーツが地域の活動として行われている。障害者スポーツも例外ではなく地域における活動で行われている。競技スポーツ、その他のスポーツ含め、自分でやりたいスポーツを選択し気軽に始められる点が特徴的である。日本と異なり、障害者スポーツセンターのような障害者専用の施設は存在せず、学校や公共の体育館などでスポーツを楽しむ。障害の無い人も障害者と一緒になってスポーツに取り組むことが当たり前なため、互いを理解し合う環境が整っていると言える。

1. 3 日本における障害者スポーツ

ここでは、日本の障害者スポーツについてその歴史や組織などから全体像を見ていく。歴史や組織を整理するために、高橋（2004）、渡（2012）より引用し述べていくことにする。

日本における障害者スポーツは、大正中期から昭和初期にかけて目や耳に障害を抱えた人々による大会が開催されていたと言われている。しかし、第二次世界大戦中障害者によるスポーツは全く行われなくなった。戦争時は、動ける者は兵士などに駆り出され国に貢献することを求められていた時代であり、障害を抱えていることは国からすると役に立たないということを暗に意味していた。そのためスポーツを行うこともできない身分であったことが考えられる。また、ヨーロッパの国々では、第二次世界大戦中から戦後の傷病兵の社会復帰のために国単位で動き出していたのにもかかわらず、日本にはその動きがなかった。当時の状況から難しかったのかもしれないが、障害に対する知識の乏しさ、理解

¹ 『パラリンピックへの招待』（2002）p.207

² 同上 p.208

の低さがうかがえる。

日本において、スポーツが活用されたのは1949年、運動療法士であった増田弥太郎らによって導入されたのが始まりだと言われている。その後1960年に、ストーク・マンデビル病院でグットマンのもとでリハビリテーションを学んだ国立別府病院の中村裕によって車いすバスケットボールが導入された。これが、障害者によるスポーツが認知され始めたきっかけと言える。

国として障害者スポーツが認知され始めたのは、1962年にイギリスで開催されたストーク・マンデビル競技大会に日本人2名が参加したことからである。出発前に総理官邸で壮行会が開かれるなど華々しく報道され、競技、スポーツとして認知される基礎が築かれた。障害者におけるスポーツが発展したのは、1964年に開かれた第13回国際ストーク・マンデビル競技大会（パラリンピック東京大会）が契機である。この大会は、1部国際大会、2部国内大会で構成されていた。前者は世界各地から車いす使用者が参加、後者は国内各地で、車いす使用者、視覚障害、聴覚障害、機能障害、切断などの障害を抱えた人々も参加した。ドイツからの選手も参加、また、パラリンピックが開かれると言うことで、全国各地で障害者の競技大会が開催されるようにもなった。2部で行われた国内大会が、全国身体障害者スポーツ大会として国民体育大会と同開催地で開催されるようになった。この時期に設立された、(財)日本身体障害者スポーツ協会と全国身体障害者スポーツ大会は、その後の障害者スポーツの発展における重要な役割を担った。この時期は、政府が各地で行われていた障害者スポーツ大会に予算補助をしはじめたり、現大阪市長居障害者スポーツセンターが日本初の障害者を対象としたスポーツセンターとして開設されたのをはじめとして、障害者スポーツが普及していく土台となった。当初は情報が少なく海外から紹介されたスポーツには限りがあったが、1975年以降車いすバスケットやアーチェリーなどに加えて様々な障害者スポーツが紹介、導入された。これによりそれまで限られた範囲の中でしか活動出来なかったものが、スポーツを行う人がそれぞれの嗜好に合わせたスポーツを実践出来るようになり、普及につながった。普及していくと同時に指導者の必要性も唱えられた。(財)日本身体障害者スポーツ協会では1966年より競技大会には欠かせない、審判や役員、指導者を養成してきた。1985年には、発展していく障害者スポーツを支えていくために指導者資格制度を発足させ、障害者スポーツの組織的な指導者養成に動いた。現在では約2万人が指導者資格を有し指導に当たっている。

1991年に1998年長野でパラリンピックが開催されることが決定した。そのため、パラリンピックに向けて選手強化が始まり、これを機に日本での競技志向、競技性が注視されるようになった。競技力向上、パラリンピック出場の記録公認を目的として、ジャパンパラリンピックが開催されるようにもなった。1995年からはパラリンピックに向けた合宿も図時行われるようになり、1998年の長野パラリンピックでは金銀銅合計41個のメダルを獲得した。障害者スポーツが発展していくにつれ、競技志向が高まり国としてメダルを獲りに行く姿勢が見え長期計画を促したと言える。また、パラリンピックそのものが国の医療レベルやその国の強化レベルを端的に表すものであり、日本のレベルを世界に見せる大きな機会でもあったということが考えられる。そして、メダルを獲得する最中でメディアの障害者スポーツの取り扱い方も変化してきた。アトランタパラリンピックでは写真付き記事がわずか13件あるのみであったが、長野パラリンピックは、243件と急増している。それ

まで社会面での取り扱いがほとんどを占めていたのが、スポーツ面への取り上げられ方に变化した。自国での開催というのが大きいと思われるが、記事の取り扱われ方については障害者スポーツが福祉の面からまさにスポーツへと認知されたということを表しているだろう。

その後、1999 年それまで（財）日本身体障害者スポーツ協会と身体障害と限定していたものを、知的障害者のスポーツを身体障害者のスポーツと統合していくために（財）日本障害者スポーツ協会と改名した。文字通り、あらゆる全ての障害を抱えた人々のスポーツを担当していく団体として活動し始めた。内部組織として、同年に日本パラリンピック委員会（JPC）を設置し国内の障害者スポーツの強化を図った。東京パラリンピック以降、各地で障害者スポーツ団体が組織されるようになった。日本パラリンピック委員会の発足されたことから、2000 年からは登録制により加盟団体を募集し、障害者スポーツ競技団体協議会を組織して、加盟団体との連絡調整、選手強化を組織ぐるみで行っている。また、同年に日本障害者スポーツ協会が日本体育協会に加盟し、障害者のスポーツと障害の無い人のスポーツの統合がはじまった。2013 年には、2020 年に東京オリンピック・パラリンピック開催が決定し、より一層障害者スポーツへの関心がメディアを通じて高まってきている。これまで障害者スポーツは厚生労働省の管轄であったが、2014 年にリハビリテーションを除いて文部科学省の管轄となっている。

1. 4 障害者スポーツの分類

これまでヨーロッパ、特にドイツにおける障害者スポーツ、日本の障害者スポーツを歴史や組織、特徴の面から見てきた。いち早く障害者スポーツを取り入れた海外の国では、制度、組織や施設など健常者と同じように活動でき、障害者スポーツへの理解が進んでいると言える。日本では、海外より遅れをとっている分、障害者スポーツへの理解は低い。それは、施設や指導者の数などに顕著に表れている。しかし、当たり前ではあるが時が進むにつれ改善傾向にあり、2020 年東京でパラリンピックが開催されることでより一層障害者スポーツに注目が集まっている。

障害者スポーツに注目が集まるようになってきている一方で、障害者にとってスポーツが与える意義は何かという根本的なものが軽視されがちである。ここでは、先述のドイツの障害者スポーツ連盟が設定している 3 つの分類を、障害者にとってスポーツが与える意義を含めて述べていく。

奥田(2010)によると、ドイツの障害者スポーツは目的に応じて次の 3 つに分類されている。

①リハビリテーションスポーツ

医師により処方され、グループで行われる。グループで行うことにより、他者との交流、共同体での体験がはぐくまれ、リハビリの過程を肯定的なものにする。スポーツは楽しみをもたらし、様々なことに対しやる気や自信を高めさせる効果がある。

②生涯スポーツ

健康促進の面のほか、スポーツの心理的効力が広義の目的となっている。生涯スポーツ

において、自意識の向上と社会的コンタクトを持つことが、障害者の社会への統合に非常に肯定的な効果がある。生活に寄り添ったスポーツという点からリハビリスポーツの延長であり、また競技スポーツへの原点でもある。

③競技スポーツ

スポーツは、個人の力を最大限に投入し勝利と記録に向かって努力されるとき、競技スポーツとなる。障害の違いによってクラス分けがされ、チャンスの均等性とフェアな競争が確保されている。

このようにリハビリテーションスポーツにより、同様の障害を抱える者と交流したり自信を付けることができ、更に生涯スポーツや競技スポーツの入り口となっていることが分かる。競技スポーツは、競争に焦点があるがリハビリテーションスポーツ、生涯スポーツは他者との交流に目が向いている。特に生涯スポーツは、社会と関わることにより社会への理解を促し統合していくことに大きく貢献している。

2. パラリンピックとスペシャルオリンピックス

障害者スポーツの領域として、リハビリテーション、生涯スポーツ、競技スポーツが挙げられた。この章で、特に注目したいのは、生涯スポーツ、競技スポーツの2つである。生涯スポーツは、第1章4節でも述べたように、健康促進だけでなく社会参加を促す面が非常に強く、地域単位で行われるため、競技力は高いとは言えないという特徴がある。競技スポーツは、勝利を目的とする点で生涯スポーツとは異なる。リハビリテーション、生涯スポーツという段階を経るため両者の特徴も持ち合わせていると言える。第2章では、競技スポーツの代表される大会としてパラリンピックを、生涯スポーツ、社会参加という観点からスペシャルオリンピックスの2つを挙げて紹介する。

2. 1 パラリンピック

本論文ではこれまでパラリンピックという言葉が度々登場してきた。障害者スポーツを語る上ではかかせないものであると言えるだろう。それだけ障害者スポーツにおいて非常に大きな国際大会として知られているということだ。パラリンピック (Paralympic) とは、4年に1度、オリンピック終了後にオリンピック開催都市で行われている「もう一つの (Parallel) + オリンピック (Olympic)」のこと³である。第1章でも述べたように、パラリンピックはリハビリテーションの成果を競う大会として、イギリスのロードヴィッヒ・グットマンによって開催されたストック・マンデビル大会が起源となっている。日本パラリンピック委員会によると、この大会に出場するためには、「①大会で定められた標準

³ パラリンピックとは 日本パラリンピック委員会
<http://www.jsad.or.jp/paralympic/what/index.html> (2016,08,27) より引用。

記録を突破②世界ランキングの上位に入り出場権を獲得③世界選手権大会や地域選手権大会で出場権を獲得などの厳しい条件をクリアしさらに国内の競技団体に選考されなければならない。」としている。大会に出場するためには、相当な競技力を有さなければならないことが分かるだろう。

パラリンピックの意義

パラリンピックの意義を考える前に、なぜ障害者がスポーツをやるのか、その意義について考えていきたい。

障害者スポーツは、最初リハビリテーションから始まったことから健康や機能訓練、社会復帰を助けるものである。このことから、障害を抱えているからこそ、健常者よりもより一層健康などに気を遣う必要性がありスポーツを取り入れる意義があるといえる。また、高橋（2004）によると、障害者にとってスポーツは「健康増進はもとより障害受容を促すだけでなく、障害そのものを意識させなくなるほどの影響力を持ち、また、自己決定権の尊重、自己選択権の行使、QOLの向上」の効果がある。身体的だけでなく、心理的にも影響を与える力があるのである。

パラリンピックの意義について考察していく。パラリンピックは障害者スポーツの国際大会である。世界中からくる障害者たちのために、街中や施設のバリアフリー化する動きが活発になり、ハード面の改善が障害者を含めた生活を豊かにすることの一役を担っている。また、より性能の高い補助具が開発され、それを世界に発信することでより障害者の生活向上につながる。先述のQOLの向上に非常に効果的であると考えられる。もう一つは、パラリンピックは「人間の可能性を見出す最高のスポーツ大会」⁴であり、障害を抱えていてもこれだけのことができるのかという障害者理解につながる。オリンピックは超人たちの祭典と言われているように、並外れた身体競技力を見ている者を楽しませる。この面から、パラリンピックも競技性が向上している中、見ていて楽しめるものになりつつあると考えられる。

2. 2 スペシャルオリンピックス

生涯スポーツ、主に社会参加の側面からスペシャルオリンピックスについて考察していく。スペシャルオリンピックスは、知的障害者にスポーツ・プログラムを提供する国際的な組織⁵である。1963年に、故ジョン・F・ケネディ大統領の妹ユーニス・ケネディ・シュライバーが自宅の庭で開いたデイキャンプが始まりである。これは、林間学校に似た形で、レクリエーション的な要素を盛り込み、知的障害を抱えた子に楽しみながらスポーツを教えたものである。その後、1963年から1968年にアメリカやカナダで300を超える同様のデイキャンプを開いた。デイキャンプが知的障害を抱えた子どもたちに効果があると確認された後、1968年シカゴでアメリカやカナダから1,000人のアスリートが参加し国際大会

⁴ パラリンピックで日本を意識改革 FN ホールディングス

http://www.fng-net.co.jp/top_itv/elem/20150323 (2016,08,29) より引用。

⁵ スペシャルオリンピックス日本 <http://www.son.or.jp/> (2016,08,30)

としてスタートした（1975 年から 4 年ごとに夏季と冬季国際大会が開催されている）。この第 1 回大会が成功したことを受け、同年にスペシャルオリンピックス財団（現スペシャルオリンピックス国際本部）が設立された。1988 年には、国際オリンピック委員会と協議し、「オリンピック」の名称を使用することを正式に許可されている。日本においては、1980 年にジャパンスペシャルオリンピックス委員会が設立され、同年スペシャルオリンピックス国際本部から 42 番目の国として加盟を認められた。当時、日本では知的障害者に対するスポーツへの理解や、認知度などの社会の理解が乏しい中、関係者やボランティアの奔走により国際大会への出場を開始する。1981 年の第 8 回夏季大会での出来事を皮切りに、スペシャルオリンピックスの輪が広がり始め、1994 年にスペシャルオリンピックス日本が設立された。アスリートの様々な挑戦をサポートし、スペシャルオリンピックスムーブメントを普及させるべく様々な活動を行っている。スペシャルオリンピックスは現在、世界 170 カ国以上約 440 万人のアスリートと約 100 万人のボランティアが参加している。

スペシャルオリンピックスの意義

遠藤（2004）によれば、スペシャルオリンピックスの使命は「知的発達障害のある人たちに年間を通じて、オリンピック競技種目に準じたさまざまなスポーツトレーニングと競技の場を提供し、参加したアスリートが健康を増進し、勇気をふるまい、喜びを感じ、家族や他のアスリート、そして地域の人々と、才能や技能そして友情を分かち合う機会を継続的に提供すること」である。また目的は「トレーニングや競技を通じて、知的発達障害のある人たちが、その技術や才能を高め、その成果を示すことのできる公平な機会を提供し、彼らの可能性や、ニーズをより広く知らしめることにより、生産的で尊敬される社会の一員として社会参加できるようにすること」としている。これらのことから、スペシャルオリンピックスは、オリンピックやパラリンピックに見られるお祭りの、イベント的な要素はなく、スポーツを通じて、知的障害を抱えた人々の自立や社会参加の促進、彼らを受け入れ共生していく社会を実現することに重きがおかれていることが分かる。

独自性

スペシャルオリンピックスには本論文で比較対象としているパラリンピックにはない独自性が 3 つある。⁶

- ① すべての技術レベルに対してさまざまなスポーツの機会が提供される。
- ② すべてのアスリートが同様の技術レベルのグループ（ディビジョン）で競技するために、ディビジョニングと呼ばれるプロセスがある。
- ③ 競技したすべての参加者が表彰される。

パラリンピックに見られる競技性はほぼないに等しいが、勝ち負けの結果ではなく、参加するという行為に目が向けられている。もちろんディビジョニングによって競い合う環境も用意されていて、よりアスリートの到達意欲を促進させるものとなっている。

⁶ 『スペシャルオリンピックス』（2004）p.211

ボランティア

スペシャルオリンピックスが知的障害を抱える人々のためのスポーツ組織であることから、ボランティアの重要性は極めて大きい。ユニスが初めてデイキャンプを開いた時も、近くにある学校やカレッジにボランティアの派遣を頼んでいる。小森（2013）によれば、日本では 2009 年には 47 都道府県全てに活動が広がり、7,662 人のアスリートと 17,102 人のボランティアが参加している。まだ知名度の低い日本でさえも、これだけの人数がボランティアに登録しているのである。2005 年長野で開催されたスペシャルオリンピックス冬季世界大会の運営に参加したボランティア数は 9,935 人にのぼり、案内や宿泊対応、警備など多岐にわたる業務をすべてボランティアでまかなった。また、企業参加型ボランティアも特徴の一つである。大きい大会へのボランティアとしての参加が、次へのイベントボランティアへの参加につながり、地域での継続的な活動への参加も促している。ボランティア活動は、知的障害を抱える人々について知ること、交流により偏見を克服できる点に効果あると言える。知的障害者も障害を持たない人と接することにより、社会性を学ぶことができ、障害者スポーツの側面の一つである社会参加を促す点において重要な役割を果たしている。

3. 2つの活動の取り組みと比較

2 章では、同じく障害者スポーツであるが、競技志向の高いパラリンピックと障害者に寄り添い社会参加を促すことに力点があるスペシャルオリンピックスを比較し、その特徴を整理した。第 3 章ではそれをさらに掘り下げて、2 つの活動の取り組みの実際を比較し、本論文の最終的な問いに答える第 4 章につなげていきたい。

3. 1 パラリンピック

国際パラリンピック委員会(IPC)戦略計画 2015～2018 年によれば、パラリンピックムーブメントの究極の目標は、「パラスポーツを通じて障害者にとってインクルーシブな社会を創出する」である。そのための最終的なゴールとして、「①パラリンピック競技大会を最高のスポーツイベントとして成し遂げる ②パラアスリートを支援し、パラスポーツを発展させる ③パラリンピック・ブランドの認知度と価値を向上させる」の 3 つを掲げている。噛み砕いていくと、国際的な動きの中では、選手の強化により、競技性を高め競技会を通じて発展させていくという流れであると言える。それらに対する支援も準じて行われている。「観る」ということから、障害者を知り、理解につなげていく方針であると考えられる。

以下で、日本で行われている取り組みを、各種イベント、教育、ボランティアの 3 つの観点から述べていく。

各種イベント

国際的な動きの中で競技力の向上が挙げたように、日本でも競技力向上を目的とした取り組みが行われている。選手発掘事業はその一つである。これは、パラリンピック競技

体験プログラムや実践プログラムを提供することにより、将来のアスリートを発掘する取り組みである。普及・啓発の取り組みとしては、東京都オリンピック・パラリンピック準備会が区市町村、都各局と連携しパラリンピック競技体験等のプログラムを実施し、認知度の向上と理解促進を目的に活動している。また、2020年に東京パラリンピックが開催されることから、東京2020パラリンピックカウントダウンイベントとして、ブラインドサッカー教室や、車椅子バスケット体験など、各競技を体験できるプログラムを実施している。同時にパラリンピアンと実際に交流する機会を設け普及・啓発活動に取り組んでいる。

様々なイベントがある中で、ごくわずかな紹介となったが、共通していることとしては、参加型イベントによる向上・普及・啓発がなされていることである。障害者、健常者が一緒に参加できるイベントを実施することにより理解を促していることがわかる。

教育

パラリンピックの取り組みを調べていると、教育という観点からの取り組みが多いことに気がつく。東京都では、推進校を指定し研究やボランティア活動を行なっている。オリンピック・パラリンピック教育に関する有識者会議での配布資料⁷によると、この教育の取り組みは、「①オリンピック・パラリンピックそのものについての学び ②オリンピック・パラリンピックを通じた学び」の2つから構成される。①では、関する知識（歴史、意義、用具の工夫やその他の特性）のほか、選手のエピソード、大会を支える仕組み等について学ぶ。②では、実際に競技スポーツに参加して体験したり、ボランティア参加等からそれらが与える効果について学ぶ。その他にも、オリンピック、パラリンピアンを派遣し、訪問授業のような形で、直接の交流を図っている。

教育から導入していくことで、年齢の低い子どもたちへのアプローチも行き届き障害者、障害者スポーツへの理解がより容易になるのではないかと考えられる。学校教育という誰しもが通過する過程での導入は、その後のかわり方においても影響を与えるであろう。

ボランティア

障害を抱えていることから、スポーツを行う際非常に多くの支えが必要となってくる。指導者の問題は、障害者スポーツ全体の問題として捉えられるのでここでは触れないとする。パラリンピックにおいては、今や巨大化したスポーツ大会である。その運営は、多くのボランティアによって支えられている。パラリンピック大会全体のボランティアは、大会ボランティアと都市ボランティアに分けられる。⁸ 前者は主に観客や競技のサポート、メディアサポート等大会運営を支える。競技会場や選手村に配置されるため、選手との関わりも多い役割である。後者は、主に観光案内や交通案内を担う。パラリンピックともなれば、世界中から障害者が訪れると考えられるため対応力が試される。職業、年齢、国籍問わず多くの人が参加する。2012年のロンドン大会では、ボランティアが大会の成功に大

⁷ オリンピック・パラリンピック教育推進に向けて最終報告（案）

http://www.mext.go.jp/sports/b_menu/shingi/004_index/shiryo/___icsFiles/afldfile/2016/08/08/1375282_3.pdf(2016,11,15)

⁸ 東京ボランティアナビ

<http://www.city-volunteer.metro.tokyo.jp/jp/about/>(2016,11,15)

きく貢献したと言われている。また、ロンドン大会を契機にロンドン市民の半数以上がボランティアに関心を示し、初めて行う人も増え、大会終了後も活動を継続するなど波及効果も見られた。⁹

間接的にかかわるだけでなく、選手と直接かかわるスタッフの存在もある。ブラインドサッカーでは、障害者の倍近くの人数の晴眼者（目の見える人）が関わり、彼らを支えている。盲人マラソンの伴走者は、選手と息を合わせることが最重要である。朝から晩まで一緒に練習することで、お互いを理解することができる。以上挙げた例のように、障害者スポーツ特有の関わり方は、支えるとともに必然的に障害者を理解する方向へと進むと考えられる。

3. 2 スペシャルオリンピックス

スペシャルオリンピックスは性別、年齢、スポーツのレベルを問わず、共に成長し、共に楽しむ、そしてその経験を分かち合うことが重要と考え活動¹⁰している。最も大切な活動は、地域で毎週行われるスポーツ・プログラムであり、ボランティアが運営し、コーチを務めアスリートと一緒に楽しむことである。そのため、日常プログラムをサポートしていく人材を育成するクリニックが開催されている。また、最大の特徴として、アスリートにスポーツトレーニングの機会を提供してだけでなく、スポーツを通じて知的障害のある人と無い人が互いに交流し、互いに理解し合う「ユニファイドスポーツ」、アスリートたちの様々な能力を高めることを目的とする「アスリート・リーダーシップ・プログラム」、アスリートの健康を増進し医療・保健に携わる人たちに知的障害に対する理解を促進するための「ヘルシー・アスリート・プログラム」、そして、学校世代の若者を対象にした「学校連携プログラム」等の様々な取り組みを行っている。

公益財団法人スペシャルオリンピックス日本のHPを参考とし、以下で紹介していく。

ユニファイドスポーツ (Unified Sports)

知的障害のある人とない人でチームを作り、練習や試合を行う。スポーツを通じて、互いの個性を理解し合い支えあう関係を築いていく取り組みである。世界中で展開されており世界大会公式種目としても実施されている。障害の有無を越え、スポーツを通じて喜びや悔しさ、達成感など様々な経験を共有し、お互いの理解、友情を育むことを目指し、また社会的インクルージョンの実現を促進することを目標としている。

アスリート・リーダーシップ・プログラム (ALPs)

スペシャルオリンピックスにアスリートとして参加するだけでなく、ボランティアとして、コーチとして活動するためのプログラムを提供し、アスリートの可能性を広げる役割を担っている。同時にプログラムに取り組むアスリートを支えるボランティアのトレーニ

⁹東京ボランティアナビ

<http://www.city-volunteer.metro.tokyo.jp/jp/about/>(2016,11,15)

¹⁰ スペシャルオリンピックス日本

http://www.son.or.jp/about_son/so_philosophy/(最終閲覧 11/15)

ングや支援も行う。同プログラムの参加者からは、自らの健康に関すること、多くの人と関わってスポーツを楽しむこと等の声が上がり、健康や社会参加における面で効果を表している。

ヘルシー・アスリート・プログラム (HAP)

アスリートの健康増進、健診を行い、その結果を本人や家族に伝え、健康に対する意識や知識の啓蒙を行い、生活の質の向上(QOL)を目指している。HAP には、

1. 身体の柔軟性やバランス (ファンフィットネス)
2. 視力 (オープニングアイズ)
3. 口腔 (スペシャルスマイルズ)
4. 聴力 (ヘルシーヒアリング)
5. 足のケア (フィットフィート)
6. 栄養・生活習慣 (ヘルスプロモーション)

以上の 6 つの部門が設けられている。全ての領域に対して、専門家や医師がボランティアとして参加し、小学生から成人までの健診や教育に携わっている。

学校連携プログラム

学校と連携し、学校世代の若者対象にスペシャルオリンピックスの活動を知ってもらう取り組みである。“～SO GET into It～” と言い、「SO に参加しよう」という意味である。多様な切り口が可能なこのプログラムは、知的障害者理解、心の教育、生きる力、人権、福祉、ボランティア活動など学校側のニーズに合わせて用いられ、教育現場の課題解決への貢献が期待されている。小森(2013)は著書において、学校連携プログラム(知的障害児・者との短期交流プログラム)によって知的障害児への児童生徒の意識がどのように変化したか考察している。短期交流体験でも、意識は肯定的になることが証明され、インクルージョン、交流への積極性に大きく影響を与えることがわかった。

ボランティア

先述のようにスペシャルオリンピックスでは、運営等をボランティアの手によって行っている。また、自分のできることをできる範囲で取り組めるように様々なスタイルで行っている。

① スポーツトレーニングのボランティア

地域で日常的に行われるトレーニング現場での、アスリートに指導するコーチ、それを支えるマネージャー、一緒にトレーニングする

② 大会・イベントボランティア

競技会やチャリティイベント等の運営をサポートする

③ 事務局ボランティア

ニュースレターや資料の整理・送付など事務局の仕事を行う

などの種類がある。遠藤(2004)によれば、多くの人がボランティアに参加する理由として「障害を持つ人と接し、その人たちの心の美しさ純粋さを知り、結局手伝っている自分が

教わるが多いため」と答えたそう。障害者と直に関わることは、それまで障害者に抱いていた概念を変えることを可能にし、障害を知り、障害者を理解することにつながる。ボランティア等の取り組みを通じてお互いを理解しあうことが可能になるのである。

3. 3 両者の比較

これまで、パラリンピック、スペシャルオリンピックスの取り組みを紹介してきた。本節では、両者を比較しどちらがより障害者理解につながっていくのかを考察していく。

両者の取り組みの中で考えられる大きな違いは、競技力を高めるための取り組みをしているかどうかである。パラリンピックは、競技性が高くメダルを取ることが一種のステータスである。また、「観る」という観点から障害者スポーツを知ってもらう、理解してもらうことが期待される。「観る」ことから知ってもらうには、競技力の向上は切り離すことはできない。一方スペシャルオリンピックスは競技性は高くないがそもそもの目的がパラリンピックとは異なる。よって、この違いは両者の特性、特徴の違いから表れるものであると言える。

いくつかの共通点も存在する。まず 1 つ目は、健常者、障害者双方が共に取り組む参加型の取り組みを開催していることだ。両者ともに、参加型の取り組みにより普及・啓発を促している。スポーツを通じて様々なことを経験し共有することで、お互いを理解し支えあう、社会的インクルージョンの実現を目指している。そのうえでスポーツが重要な役割を果たしているのである。2 つ目は、学校教育の中で取り組んでいることだ。障害者理解の学習、障害者スポーツの体験や障害者との交流など、障害者理解を進める教育を一層充実させ、多様性を尊重し、障害を理解する心のバリアフリーを子供たちに浸透させる狙いがある。3 つ目は、大会・活動等をボランティアの手によって運営していることである。パラリンピック、スペシャルオリンピックス共にかなりの人数がボランティアとして関わっていることはすでに述べた。また、ボランティア参加が新たなイベントのボランティア参加にも繋がり、継続的な活動に寄与している。ボランティアとして関わるのが、支えることを越えて障害者の方から学ぶ、また自らの能動的な活動につながる取り組みとしての側面があると考えられる。

以上述べてきたことから、2 つの活動は特性、特徴の違いにより表れる取り組みの違いはあるにせよ、本質的には同様のことを行っていることが分かる。しかし、同様の取り組みの中にもまた違いが存在する。スペシャルオリンピックスは、1 つの組織として組織的に活動に取り組んでいる。活動が複雑化していないため、文献やインターネットで調べていく際、アクセスしやすく非常に理解がしやすい。

一方パラリンピックは、1 つの大きな組織があるものの、様々な組織や団体が別々に動き活動しているため複雑になっている。この影響は、本章 1 節 2 節でも述べているように、障害者理解だけでなく、両者の異なる取り組み、障害者の健康に対する取り組みやスポーツ以外の能力を高める取り組みをしているかしていないかということに表れているのではない。

ここまで 2 つの活動の取り組みについて比較し、違いや共通点を見てきた。ここで一度整理すると、2 つの取り組みには、同じく健常者・障害者の参加型の取り組みがある。だが、

参加の在り方が明らかに社会参加としての取り組みとして意識されているかに違いがある。かつ、その取り組みが組織的に行われているかに違いがある。これらの点は、良い点悪い点と考えることもできるが、両者の特性を補い合うことが可能であると考えられる。障害者理解に共通する理念があり、同様の取り組みを行っているのだからこそ、どちらが優れているという議論ではなく、良い点は伸ばし、足りない点を相互で補っていく、両者の関わり合いを強くすることが出来れば、更なる障害者理解へとつながるのではないか。現在日本障がい者スポーツ協会により、障害者スポーツ全体は統括されているがその裾野は広くない。また、主にメジャーなスポーツを多く推奨しているため、それ以外のマイナーなスポーツへの取り組みが十分では言えないという現状がある。今回本論文で比較考察してきた、パラリンピックとスペシャルオリンピックスはメジャースポーツとマイナースポーツと置き換えることができる。それを踏まえると、両者の関わり合いが非常に薄いことがわかる。障害者理解につなげる上で、組織の構築は課題としてあげられるだろう。

4. 障害者の真の理解のために

4. 1 小括

1章では、障害者スポーツの歴史を述べて、ドイツを参考に障害者スポーツの分類を挙げた。その分類の中で、競技スポーツと社会参加という側面からの生涯スポーツを選び、前者はパラリンピックを後者はスペシャルオリンピックスを取り上げ、2章でその歴史や意義について述べた。3章では、さらにその2つの活動の取り組みを調べ、どちらがより障害者の理解に繋がるのか比較考察を行った。

本論文本来の目的は「障害者の真の理解につなげるための障害者スポーツの考察」である。障害者スポーツは、①障害者にとっての意味②障害者以外にとっての意味に大きくわけることができ、また、①はスポーツを実際に「やる」、②は「観る」とことと考える。本論文の目的を考えると、②「観る」の方を主としていくことになる。そして、②に関しては「観る」だけでなく「参加」ということも含める。

当初論文を執筆するにあたり、スペシャルオリンピックスの存在を知らなかった。パラリンピックに関しては、オリンピックと並ぶ競技会であり、認知度もそれなりにあるため知っていた。

パラリンピックそのものは障害があるとはいえ、競技性も高くメディア露出もある。障害を抱えていても「こんなことができるのか」という発見に近いイメージを抱いた。メディア露出の点を含めて考えると、私が抱いたようなイメージのような理解に繋がる。以上が、調べる以前の私の考えである。

スペシャルオリンピックスを調べてみると、パラリンピックに見られる競技性はないが、成り立ちや歴史を踏まえて組織的に確立された取り組みがある。ボランティアを初めとして、スポーツを通じて障害を越えて障害者と障害者以外の者が理解し合えるような取り組みがなされている。観るという点は期待できないが参加型の取り組みも多く、障害者を理

解するという観点からは、スペシャルオリンピックスの活動の方がパラリンピックよりも役立つのではないかと考えた。

しかし、パラリンピックもただ単に観るだけのスポーツではない。改めてパラリンピックについて調べてみると、表面的に見られる華々しいもの（結果を残して、メダルを取る等）だけでなく、スペシャルオリンピックスに見られるようなボランティア、参加型のイベント等の取り組みがあり、スポーツを通じた障害者の理解を目的とした取り組みを行っている。両者は、成り立ちや歴史、特徴など様々な違いはあるが、障害者スポーツとして本質的に同様の取り組みを行っていることがわかった。

ボランティアの在り方

これまで、共通要素、障害者の理解につながるものとして参加型の取り組み、ボランティア、教育を挙げた。また、障害者スポーツを①「やる」②「観る」の2つに大別し、「観る」の中に「参加」を含めるということを述べた。

本論文では、ボランティアという言葉が度々登場してきた。そこでは、ボランティアに「参加」というような表記を用いてきた。参加型の取り組みは「参加」に分類するが、ボランティアはどうだろうか。ここでボランティアを再定義していく。

パラリンピックやスペシャルオリンピックスでは、ボランティアは共通して大会運営や補助として機能している。スペシャルオリンピックスでは、さまざまな形でのボランティアが存在し個人に沿った形で取り組むことができる。パラリンピックでは、スペシャルオリンピックスほど柔軟性に富んだボランティアの形はないが、障害者スポーツの特性上選手をサポートする人がともに練習を行うなど、スペシャルオリンピックスと同様であるといえる。また、ボランティアは継続性がある点が特徴的であり、障害者理解はもちろん、その理解を実践につなげる取り組みであると考えられる。

一方参加することでは、主にイベントがあげられる。障害者とともにスポーツをやる、競技をやる、体験することがメインである。イベントであるため、一過性のものが多いのが特徴だと考えられる。継続して参加する人もいるだろうか、それほど多くないだろう。また、障害者理解が目的でそこにとどまってしまっていることも考えられる。

当初本論文の障害者スポーツの大別②「観る」の中の「参加」の定義は、障害者理解につながる方法の一つとしていた。それらを含めて考えると、本論文「参加」の定義には参加型の取り組みが当てはまり、ボランティアは別の新しい見方であると言える。

4. 2 理想的な障害者スポーツの在り方

近年、東京オリンピック・パラリンピックが開催されることもありパラリンピックに注目が集まっている。多くの人がパラリンピックに期待しているのは、オリンピック同様観て楽しむという側面ではないだろうか。これは、本論文の1章でも述べたが障害者スポーツはリハビリテーションを起源とし歩んできた福祉的な捉えられ方から、まさにスポーツとして観るという存在に変わったことを示している。これは、障害者の理解のひとつにつながっていると考えられる。

一方で、障害者スポーツは観ることだけで理解につながるという評価でよいのだろうか

という疑問が残る。そもそも本論文の目的はスポーツだから楽しければいいというものではなく、障害者の真の理解に繋げていくことであり、更に言ってしまうと、共に生きていくことに繋がる障害者スポーツの在り方である。

スペシャルオリンピックスは競技性がないためむしろ参加することに重き、組織的に社会参加そして障害者理解を目的としている。そして、参加型の取り組みや、ボランティアによる運営が特徴的であることは今まで述べてきた通りである。一方パラリンピックは、競技性が最大の特徴であるため「観る」ことからの障害者理解が主目的である。しかし、参加型の取り組みやボランティアによる運営が同様にあり、表面的に見えている部分だけでないことも述べてきた。本論文では、主にパラリンピック、スペシャルオリンピックスの2つの活動のみしか扱わなかったが、その他の障害者スポーツ活動においても同様のことが言えるのではないかと考える。障害者と共にスポーツに取り組む体験する、ボランティアとして関わり支える、運営していくことにはかなりの比重が置かれていると考えられる。そうであるならば、「観る」と同様に「参加」すること、さらに本章で新しい見方として再定義した「ボランティア」の意義が高く評価されていいはずではないか。

日本では、海外に比べて障害者スポーツの認知度、障害者理解が低く遅れていることは1章で述べた。小森(2013)によれば、アメリカではスペシャルオリンピックスの認知度は93%で、パラリンピックより多くの人に認知されている。これ程のマイナーだと言えるスポーツでも理解が広がっているのだ。アメリカでは、この土台があるからこそ社会的インクルージョンが進んでいる。このような土台は日本にはまだ存在しない。だからこそ、本論文で挙げたパラリンピックやスペシャルオリンピックスに代表される障害者スポーツがお互いに良い点を伸ばし、足りない点を補い合う存在になるべきである。

障害者スポーツをスポーツとして観戦するということが評価され注目され、「観る」ことからの理解に繋がっていくこと。その先に「観る」という側面と一緒に、スポーツと一緒にやっていく、障害者と共に体験していく「参加」という側面に繋げていく。また、ここでボランティアに興味を持ってもらう。パラリンピックのような大きな大会のボランティアでも、地域における小さな活動のボランティアでも携わることでそれまでの障害者に対する意識を変え、理解につなげることができる。また、全てが連動していくことで継続的に取り組むことができるようになると思われる。

3章で述べたが、障害者スポーツそれぞれが取り組んでも効果は著しく大きくはならない。その意味で障害者スポーツ全てを包括する組織の在り方も重要になってくる。1つ1つ別々の組織、団体で行うのではなく1つの組織として行っていくことで、今あるそれぞれの組織の足りない点を補い合うことができるだろう。これが障害者スポーツを障害者理解に繋げていくことのできる態勢づくりを可能にする。

以上から、障害者の真の理解につなげる障害者スポーツの在り方は一つの限定されたものではないことがわかる。障害者スポーツを一つに包括し、全体で足りない点を補い合う形である。例えば、障害者スポーツは全体的に認知度が低い。パラリンピックは競技性もあり、認知度が比較的高いので、「観る」側面からの理解に適している。高橋(2003)は著書で、障害者スポーツはまず観ること、それが障害を知ることになり理解に繋がると述べている。理解することの第一歩として、「観る」ことが重要だということである。同時にスペシャルオリンピックスに見られる組織的な参加型のイベントを開催して更なる理解につな

げる。ボランティアの重要性も合わせ、継続的な取り組みによって理解を深め実践していく。これが、今考えうるモデルであろうか。一つに限定せず、足りない点をそれぞれが補う柔軟性を組織的に構築していく、そうしてできた形が障害者の真の理解に繋がる障害者スポーツの理想的な在り方ではないだろうか。

おわりに

本論文は、障害を抱えた親戚への私自身の問題意識から始まり、障害を含めた障害者をどのようにして理解するかを目的としてきた。手段としてスポーツを切り口とし、障害者理解のための障害者スポーツの在り方を模索してきた。

障害者を理解するために、障害者スポーツはパラリンピックなどの活動が単体ひとつで取り組むのではなく、全ての障害者スポーツが協力してお互いを補い合いながら取り組むことが重要である。また、それを包括する組織の再構築も必要だと考えられる。具体的には障害者スポーツを「観る」ことから始まり、障害のある人とそれ以外の人と一緒に「参加」するイベントの開催、「ボランティア」活動による継続的な障害者に関わりということがモデルとして挙げられる。その他にも、教育での取り組みが障害者理解に大きな効果があることが明らかになった。スポーツは、これまで国や人種を超えて人々をつなげてきた。そのスポーツの力は当然障害者スポーツにも宿っている。障害者スポーツへの関わり方、障害者スポーツの在り方は、障害の無い人の障害に対するバリアを取り除き、障害の有無を超えた結びつきを作ることが可能になるはずだ。本論文が、障害者スポーツの在り方に少しでも寄与できれば幸いである。

今回は、障害者スポーツの比較の部分で、パラリンピックとスペシャルオリンピックスの2つのみしか扱わなかった。障害者スポーツには他にも種類があり、本論文で述べてきた以外の新たな見方が発見できたかもしれない。また、本論文の目的上障害者スポーツは挙げたものの、障害の無い側からの一方的な理解の方向にとどまる考察になってしまった。これらの点に関しては、今後の課題としたい。

本論文執筆によって、さらに障害者スポーツに興味を持つことが出来た。2020年東京でパラリンピックが開かれるため、私も何らかの形で携わりたいと考えている。また、障害を抱えた親戚もスポーツをやっているのも、私自身との共通項としてのスポーツで更なる親交を深めていきたい。

参考・引用文献

遠藤雅子, 2004, 『スペシャルオリンピックス』 集英社

小森亜紀子, 2013, 『スペシャルオリンピックスがソーシャル・インクルージョンに果たす役割-学校連携プログラムにおける交流経験を中心に-』 風間書房

芝田徳造・正木健雄・久保健・加藤徹, 2015, 『すべての人が輝く、みんなのスポーツを オリンピック・パラリンピックの壁を超えて』 クリエイツかもがわ

高橋明, 2003, 『共に生きる〔講演録〕-障害者のスポーツを通して』 文芸社

高橋明, 2004, 『障害者とスポーツ』 岩波新書

土田和歌子, 2010, 『身体障がい者スポーツ完全ガイド』 東方出版

中村太郎, 2002, 『パラリンピックへの招待-挑戦するアスリートたち』 岩波書店

山口泰雄, 2004, 『スポーツ・ボランティアへの招待-新しいスポーツ文化の可能性』 世界思想社

渡正, 2012, 『障害者スポーツの臨界点 車椅子バスケットボールの日常的実践から』 新評論

奥田睦子, 2009, 「ドイツにおける障害者の地域スポーツ活動への参加を支える社会的制度とその論理に関する一考察」『金沢大学経済論集 第30巻 第1号』

斎藤春菜, 2011, 「障害者スポーツとノーマライゼーション」『早稲田大学文化構想学部現代人間論系岡部ゼミゼミ論文』

富島磨由美, 2013, 「障がい者の自立と社会参加における調査と研究-知的障がい者の自立と社会参加支援」『大成学院大学紀要』 15, 225-230

藤田紀昭, 2014, 「障害者スポーツの過去、現在、未来(特集 - スポーツと生涯発達)」『生涯発達研究』 7, 7-17

渡邊浩美, 2006, 「障害者スポーツの社会的可能性」『21世紀社会デザイン研究』(5), 135-144

パラリンピックとは 日本パラリンピック委員会

<http://www.jsad.or.jp/paralympic/what/index.html> (2016,08.27)

パラリンピックで日本を意識改革 FN ホールディングス

http://www.fng-net.co.jp/top_itv/elem/20150323 (2016,08,29)

オリンピック・パラリンピック教育推進に向けて最終報告(案)

http://www.mext.go.jp/sports/b_menu/shingi/004_index/shiryo/_icsFiles/afieldfile/2016/08/08/1375282_3.pdf (2016,11,15)

東京ボランティアナビ <http://www.city-volunteer.metro.tokyo.jp/jp/about/> (2016,11,15)

スペシャルオリンピックス日本 <http://www.son.or.jp/> (2016,11,15)

IPC 戦略計画 2015~2018 年

http://www.jsad.or.jp/paralympic/what/pdf/ipc_strategic_plan_2015-2018.pdf (2016,08,29)